

# 新しい生活様式における幼児教育の在り方 —ICT を活用して—

青木 景子

愛知教育大学附属幼稚園

## Introducing an Ideal Way of Early Childhood Education in New Lifestyle: Using ICT

Keiko AOKI

*The Kindergarten Attached to Aichi University of Education*

### 1. はじめに

私は、愛知教育大学附属幼稚園に赴任して3年目となる。1年目は5歳児、2年目は4歳児、3年目は5歳児を担当し、2年目からは附属幼稚園の教務主任を務めている。保育に関するだけでなく、園内の行事にかかわることについても計画・立案する中で、徐々に附属幼稚園の仕事に慣れてきたところである。

本園では、子どもが興味や関心をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を積み重ねる、子どもの主体的な学びを支えることを教育方針としている。また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて、遊びの中で子どもが発達していく姿を捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくりたり必要な援助を行ったりすることを大切にしている。子どもたちは、自然豊かな本園の環境に関わりながら、様々な場で遊びを見つけたり、教師や友達との生活を楽しんだりしている。

さらに、附属幼稚園に隣接している附属名古屋小学校、附属中学校合わせた名古屋キャンパスでは、3校園が一体となり、連携や協力を図っている。特に附属名古屋小学校とは、低学年の生活科単位の中で、遊びを中心とした交流活動を継続的に行ってきた。幼児・児童にとって互いに学びの場となり、幼小教員にとっても教育活動への理解が深まることを願って取り組んでいる。

### 2. 研究目的

昨年来の新型コロナウイルス禍により、子どもたちの生活と学びは大きな影響を受けている。

幼稚園では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を基に、マスクを着用することが日常化し、手洗い・アルコール消毒を徹底することとなった。始めは慣れないことに戸惑ったり、嫌がったりする子どももいたが、家庭との連携の上、徐々に習慣化されてきた。

しかし、遊びを中心とする子どもたちの生活において、困難な課題として挙げたものが、一定程度距離を取って過ごすことと、遠足や行事の実施についてであった。1つ目に関しては、『ソーシャルディスタンス』を合言葉に、距離の取り方を知らせたり、目印を付けたりして、楽しみながら人との距離の取り方を日常生活に取り入れるようにした。しかし、クラスで集まったり、並んだりする時は距離を取りやすいが、遊んでいる時は難しいのが現状である。

そして2つ目の課題となった遠足・行事についてが本研究で取り上げたい課題である。園内の生活では経験できない様々な体験や地域との関わりは、このコロナ禍で一切困難を期している。特に、公共交通機関やバスを利用した園外保育では、移動の際の感染リスクも懸念され、全て中止せざるを得なかった。このような状況の中で、少しでも子どもたちに様々な体験を保障し、今までと変わらず、またはそれ以上の新しい体験を重ねられるように園内で話し合ってきた。昨今、ICT技術や新しい教具の活用を取り入れた活動も推奨されつつあり、附属幼稚

園でも各クラスにタブレットを導入し、活動の中で疑問に思ったことを調べたり、動画を撮影し子どもたちと見る機会を作ったりしている。

そこで本研究では、ICT技術を使った新たな体験の機会を考え、子どもたちの生活や育ちを保障すること、さらにはコロナ収束後も生かせる新しい生活様式について考えることを目的とする。

### 3. 実践「じゃがいもの収穫と保育活動」

愛知教育大学は刈谷市に位置し、附属幼稚園は名古屋市東区に位置する。立地的に距離はあるものの、例年子どもたちが大学の畑の野菜を収穫する園外保育が計画されており、日頃から大学とのつながりがある。例年計画されている大学への園外保育は、6月のじゃがいも掘り遠足と10月のさつまいも掘り遠足である。6月の遠足は5歳児が、10月の遠足は4歳児が計画・実施しているものである。

筆者は今年度5歳児担任であり、6月のじゃがいも掘り遠足を準備していた。しかし、3度目の緊急事態宣言が愛知県に発令され、バスに乗って1時間近くかかることから、中止の判断をすることになった。子どもたちだけでなく、保護者からも残念な声が上がリ、どうにか方法はないかと教職員で話し合うことにした。

子どもたちは、昨年10月(4歳児クラスの時に)さつまいも掘り遠足で、大学の実習園に行き、芋掘りの経験をしている。しかし、今年は子どもたちが現地に行けないことから、じゃがいもをどうやって掘るのか、そのじゃがいもをどうやって子どもたちへ届けるのか、じゃがいもが育っている様子子どもたちに見せたい、掘ったじゃがいもを味わって欲しい…など、様々な願いがあるものの、どうしたらよいか分からず、大学の先生方に相談した。今年度、大学の企画会議に本園職員も参加していることで、大学とのつながりもあり、ICT技術に長けている職員もいることから、相談する運びとなった。すると、大学のA先生が相談にのってくださり、畑の様子をZoomにより生配信することを提案された。また、幼児教育講座の先生始め、幼児教育専攻の学生も手伝い、附属幼稚園の子どもたちのために協力していただけることになった。

#### 【6/3(木)】

大学と連携し、子どもたちの遠隔遠足が計画されたことを、子どもたちにも伝えた。教師が「じゃがいも掘り遠足が中止になったことは話したよね。でも、みんなのために大学の先生やお兄さん、お姉さんがじゃがいもを掘って、それを映像で見せてくれ

るんだって(Zoom配信のことを分かりやすく伝えた)」と話すと、子どもたちは「掘っているところが見えるの?」「テレビ電話?」などと言うので、教師は「そうだね。テレビ電話みたいな感じだね。みんなの声も聞こえるよ」と伝えた。すると、子どもたちが「じゃあ、お話ししているの?」と聞くので、教師が「いいよ。何か聞きたいことある?」と尋ねると、様々な質問が出てきた(写真1)。教師は「じゃあこの質問を、大学の先生たちに聞いてみようね」と伝え、遠隔遠足を楽しみにした。

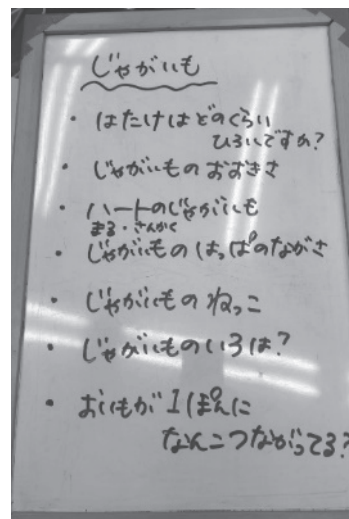


写真1. 質問

#### 【6/7(月)】

朝10時からZoomの準備をし、大学側とつないだ。大学には、本園主幹教諭が向かい、大学と幼稚園の橋渡しをしてもらった。大学側は、附属幼稚園との取り組みに興味を示し、学長始め多くの先生

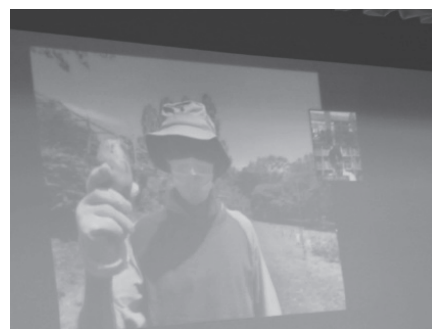


写真2. 学長挨拶



写真3. 幼稚園で開始を待つ子どもたち

方が参加してくださった。

幼稚園では、遊戯室で子どもたちが椅子に座り、大学からの連絡を待っていた。大学と映像がつながると、子どもたちは「すごい！畑が写ってる」と興奮気味にスクリーンを見た。まずみんなで「おはようございます」と挨拶すると、大学側では学長が「おはようございます。今日はみんなのために、じゃがいもを掘りますね。楽しみにしててくださいね」と話してくださり、子どもたちも「お願いします」と応えた。(写真2. 3)

幼児教育専攻の学生がじゃがいもを掘り始めると、子どもたちはその様子をじっと見ながら「わあ、すごい」「たくさんあるね」など、思ったことを口々に話していた。事前に考えておいた質問を投げ掛けられるよう、教師が子どもたちに声を掛けた。子どもたちみんなで「畑の大きさはどのくらいですか？」と聞くと、主幹教諭が仲立ちし、畑担当の大学職員が回答した。主幹教諭が子どもたちにも分かるように「幼稚園の園庭の半分より大きいです」と答えると、子どもたちは「わー、すごい」「広いね」と驚いた。次の質問では「ハートの形のじゃがいもはありますか？」と聞いた。すると、大学のA先生が「ハートのじゃがいもを見つけた人、教えてください」と学生に大声で知らせた。学生がじゃがいもを掘りながらハート型のじゃがいもを探していると、その様子を子どもたちもじっと眺め、期待に胸を膨らませていた。しばらくすると「ありました！」と声が



写真4. ハート型のじゃがいもの

聞こえ、そちらの方へカメラが向かうと、一人の学生がハート型のじゃがいもをカメラに近づけてくれた。(写真4) 子どもたちは「本当にハートだ」「かわいい」と喜んだ。また違う学生も見つけ「こちらにもありました」と見せてくれたので、教師も「ハートの形ってたくさんあるんだね」と子どもたちと話し、いろいろな形があることに一緒に感心した。

次の質問では「じゃがいもはどうやって育ちますか？」と投げ掛け、大学職員が「馬糞を肥料に使っています。馬糞が分からないかな？」と言い、大学にいる馬を見せてくれることになった。教師が「大学に馬がいるんだって。馬のうんちが栄養になって、それで大きくなるんだって。今から、お馬さんがいるところを紹介してくれます」と子どもたちに説明し、厩舎へ向かう映像を眺める。(写真5) 昨年度の遠足で大学の畑に行った子どもたちではあるが、大学に馬がいることは知らず、興味をもって見つめた。厩舎には3頭の馬がいて、馬術部の学生が紹介してくれた。予定外の訪問にもかかわらず、馬の顔や草を食べる様子などを見せてくれた。そこで子どもたちも馬の大きさや名前などいろいろな質問をやり取りしながら、馬との突然の出会いを喜んだ。

畑に戻り、掘れたじゃがいもを写してもらおうと「たくさんあるね」とじゃがいもの収穫と一緒に喜んだ。主幹教諭が「今からこのじゃがいもを持って幼稚園に戻るね。待っててね」と言うと、子どもたちは「やったー」と手を上げて反応した。教師が「みんなのためにたくさんじゃがいもを掘ってくれた大学の先生やお兄さん、お姉さんにお礼を言いましょ」と投げ掛け、子どもたちは立ち上がり「ありがとうございました」とお礼を言った。

その日の午後、主幹教諭が掘ったじゃがいもを持って幼稚園に到着した。子どもたちにじゃがいもが

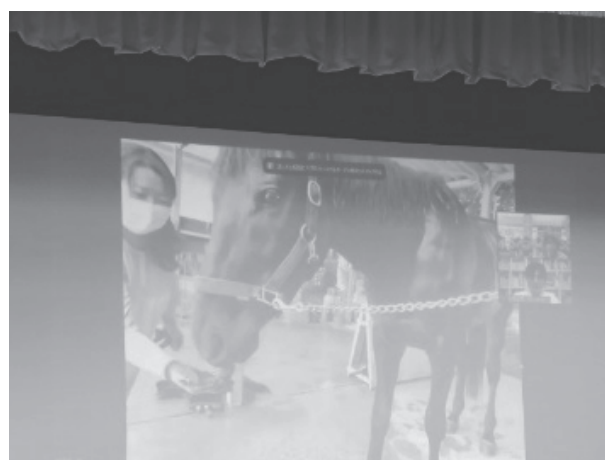


写真5. 厩舎の馬





写真6. 届いたじゃがいも



写真7. 芋洗い

#### 【6／15（火）】

大学のじゃがいもは、5歳児が1人10個程度その日のうちに持ち帰り、残りはおやつの日（毎週水曜日がおやつの日であるので）に全学年で食べることになった。16日（水）がおやつの日であったため、明日のおやつ準備で、5歳児みんなでじゃがいもを洗った。1つ1つ丁寧にスポンジで洗い、砂を落としていた。（写真7）じゃがいもを洗いながら、ある子が「小さい組さんの分も洗ってあげるね」と言うので、教師は「ありがとう。みんな喜ぶよ」と伝えた。一緒に洗っていた他の子も「僕の弟の分もあるってことだね」と言いながら、みんなのために頑張ろうという気持ちで準備していた。

しばらくして、1人の子が「じゃがいもってこれで全部？」と聞くので、教師が「まだ少しあるよ」と応えると、その子が「あとはどうするの？」と聞いた。教師が「どうしたい？」と聞くと、「カレーにしたい」と応えた。毎年、5歳児は自分たちで収穫した野菜を使って調理し、カレーを作って食べることをしていた。昨年度のコロナ禍以降、園内での調理が難しくなっており実施できていないが、そのことを知っている子もいた。教師は「そうだね。せっかくお野菜ができたから、カレーにして食べたいね。みんなで作ることはできないかもしれないけど、園長先生と相談して考えてみるね」と伝えた。そのやりとりはクラス全体でも話し、6月上旬に園内で収穫した玉ねぎを含めて、カレーを作って食べられな

いか、考えることにした。（このやりとりの前から、近くの弁当屋にカレーの調理について相談・依頼をしていた。子どもたちからの言葉を受けて進めたいと考え、このようなやりとりになった。）

【6／16（水）】

次の日、クラスでカレーのことについて話した。教師が「園長先生と相談したら、近くのお弁当屋さんが、みんなの野菜を使ってカレーを作ってくれることになりました。カレーだけじゃなく、ご飯もお皿も用意してくれることになったので、みんなはスプーンだけ忘れずに持ってきてください」と話すと、子どもたちは「やったあ」「楽しみ」と喜んだ。ある子が「お弁当屋さんにお礼の手紙書きたい」と言うので、「私もありがとうって言いたい」と口々に言い出し、自分たちのためにカレーを作ってくれる弁当屋さんに感謝の気持ちを感じていた。教師は「じゃあ、明日カレーを食べたら、お礼のお手紙を書いて渡す？」と投げ掛けると、みんなが「書きたい」と言った。明日のカレーを楽しみにしつつも、自分たちのためにいろいろな人が助けてくれることを子どもたちなりに感じていることに感心しながら、手紙を書ける紙を用意しておくことにした。

教師が「今日は昨日みんなが洗ってくれたじゃがいもをおやつでいただきます。S先生（養護教諭）たちが蒸してくださったんだよ」と話し、じゃがいもをおやつでいただいた。（写真8）



写真8. おやつ

保育室にじゃがいもが届けられると、早速近くに寄ってじゃがいもを見たり、香りをかいだりしていた。「おいしそうだね」「早く食べたいな」と言いながらじゃがいもを眺めていた。じゃ



写真9. カレー会食

が、いもを食べてみると「おいしい」「やわらかい」「もっと食べたい」と言い、じゃがいもの味を十分に味わっている様子であった。教師が「明日は、お弁当屋さんがカレーを作ってくれてくれるからね」と伝えると、さらに楽しみになった。

#### 【6/17 (木)】

昼頃、弁当屋からカレーが届き、園内が良い香りに包まれた。子どもたちもすぐに気づき、「カレーが届いた」と喜んだ。教師が「手を洗って、食べる準備ができた子から、カレーを取りに来てね」と伝え、カレーの準備をした。一人ずつご飯の入ったトレイにカレーを入れ、温かいカレーを手に席についた。(写真9)

「いただきます」と言ってみんなで食べ始めると、「おいしい」「あったかくておいしい」と口々に話しながら食べていた。「あ、じゃがいも、あった」「これ、ハートのやつかな？」など、Zoomでのじゃがいも掘りのことを思い出しながら食べる子や、「この玉ねぎ、私が掘ったのかな？」と言う子もいた。カレーを食べながら、これまでの野菜の収穫に関する、カレーができるまでのことなどを思い出しながら、子どもたちなりに感謝の気持ちを感じたり、野菜の味を味わったりしていた。

カレーを食べ終わると、早速弁当屋さんへの手紙を書き始めた。(写真10)『カレーとってもおしかったです』『カレーつくって



写真10. 手紙

くれてありがとうございます』『まいにちたべたいです』など、それぞれに感じたままに感謝の気持ちを書いて表していた。

その日の夕方、弁当屋が来園した折に、教師から手紙を渡し、子どもたちの思いを伝えることができた。

#### 4. まとめ

今回の実践を通して、成果と課題が見えてきた。成果としては、以下の3点が挙げられる。

①大学でのじゃがいも掘りの様子をライブ配信することにより、子どもたちが疑似体験することができた。

②大学・幼稚園の連携により、その日のうちにじゃがいもを間近で見ることができ、じゃがいもに触れる実体験が可能になった。

③自分たちのために様々な人がかかわって実現したことを実感できたことで、感謝の気持ちを感じたり、その気持ちを表したりする活動につながった。

課題としては、①教職員のICT技術や基礎知識の充実、②幼稚園・大学における情報機器や情報環境の整備、③ICT技術を活用した活動の充実などが挙げられる。

今回は、日頃からつながりのある大学とのZoom配信遠足を実現することで、実体験に代わる新しい体験の在り方を見出すことができた。ただし、子どもたちは昨年度、大学に出掛けて芋掘りした直接体験があったからこそ、遠隔での遠足が価値のあるものになったと言えるのではないかと考える。

また、この取り組みを通して、大学だけでなく、遠く離れた地域や他園との交流、また同じキャンパス内にある附属名古屋小学校・附属中学校との積極的なつながりなど、新しい生活様式に適応した学び方を考えるきっかけにもなった。ただ、附属幼稚園に限らず、様々な園や学校においても、このような取り組みが実現できるかどうかは今後の課題になる。

ICT教育の充実に向けて、様々な実践が積極的に取り組まれている今、単に子どもたちにICT機器に触れさせ、子どもたち任せにする教育ではなく、ICT機器を使うことで、友達と一緒に考えたり工夫したりしながら多様な経験を積み重ね、子どもたちの学びが深まるような教育の在り方を考える必要があるのではないだろうか。

#### 謝辞

今回のZoom配信に協力していただいた、野田敦敬学長始め、鈴木一成先生、幼児教育講座の先生方や学生の皆様、自然観察園の実習園担当職員などの大学関係者の皆様、子どもたちのためにご尽力いただいた全ての皆様に感謝の気持ちを申し上げます。

#### 参考文献

- ・上松恵理子(2014)「幼稚園におけるICTを活用した保育の検討—高岸幼稚園の事例より—」日本デジタル教科書学会年次大会発表原稿集3、7-8
- ・上松恵理子(2015)「初等中等教育におけるICTの活用：2. ICT教育におけるメディアリテラシー教育」情報処理56(4)、情報処理学会、322-326

・学校法人七松学園 認定こども園七松幼稚園  
(2021.3)「ICT を用いた幼児、保護者、教諭を繋ぐ幼児教育の実践」令和2年度文科省委託研究事業「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

[https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt\\_youji-000014566\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt_youji-000014566_5.pdf)

・神谷勇毅 (2019)「幼児教育における I C T活用の可能性」鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編、197-205

・中央教育審議会 (2005.1)「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について (答申)」 (第1章子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性)、文部科学省

・文部科学省 (2017.3)「幼稚園教育要領解説」